



# ライン地方のあるギムナジウム (6・完)

小 峰 総 一 郎

<p style="text-align: center;">目 次</p> <p>はじめに</p> <p>1. リューテン上構学校教学をめぐる</p> <p>2. ドイツ学カリキュラムとの関係</p> <p>3. ナチス体制下のリューテン上構学校</p> <p style="padding-left: 2em;">(1) 「ナチス教育学」, 「ナチスカリキュラム」</p> <p style="padding-left: 2em;">(2) 学校の態勢, 生徒の活動</p> <p style="padding-left: 2em;">(3) 生育歴作文——ナチス教育の「成果」</p> <p style="padding-left: 2em;">(4) 教員団, 地域と学校</p> <p>ま と め</p> <p style="padding-left: 2em;">(1) ブラハト研究への書評</p> <p style="padding-left: 2em;">(2) 展望——授業実践の教育史研究</p>	<div style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: center;">リューテン上構学校文書館資料 [2005.6 筆者撮影]</p> <div style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: center;">「ドイツ文化科」の理想を追求 第2代校長フルック (Dr. Hans Fluck) [2005.6 ブラハト氏より]</p>
---	--

## はじめに

ドイツ西部, 農村カトリック地域 (ライン地方, ヴェストファーレン州ゾースト郡リューテン町: 当時) の短縮6年制ギムナジウムたるリューテン上構学校は, 旧師範学校の「存続」を主たる動因とし, ワイマール共和国の教育民主化, 中等教育拡大の理想も併せ伴い, 兎も角も開校した (1926年春)。それが完成 (1931/32年度) して間もない1933年1月30日, ナチ党の権力掌握・ヒトラー政権の成立を迎える。同校教学は必然的にナチス教育学の支配するところとなった。とりわけ政教協約 (コンコルダート; 1933年7月20日) が, カトリック教会とナチ党との「親和」

を推し進め、その結果、授業内・授業外を問わず学校生活の全体がナチス教育態勢となって行くのだった。この過程で教員団のナチ党集団入党、さらにはアビトゥーア試験結果の修正変更という事態にまで至るのである。教員、生徒・父母、さらには地域社会、そして教会も、挙げてこの状況に自らを投企した。ブラハトは、この政治と教育の只中で変転する中等学校を（＝民主主義とナチズムの緊張の場における中等学校制度）、同校のアビトゥーア記録を通して描いた。研究ノートの後となる今回、筆者（小峰）は最初の問題設定に立ち返って同校教育のまとめを行い、併せて、この研究のもつ意義について考察したいと思う。

### 1. リューテン上構学校教学をめぐる

ベルント・ツイメク（ボッフム大学）は、「中等学校体系の拡大と分化」において、上構学校は旧教員養成機関の継続形としつつも、上構学校がアビトゥーアを付与する一般教育機関であることの意味に注目している。1922年に、ドイツ国諸州が上構学校アビトゥーア協定を取り交わして（1922.12.19の「上構学校に関する協定」で「上構学校」のアビトゥーア権を承認、上構学校を正規の中等学校として認可——小峰）、下級学校の卒業生に幅広い教養教育・キャリア教育を提供することが実現し、中等学校数の制約を補完したのだ、と。1914年の時点でプロイセンに師範学校は男子校186、女子校18（合計204校）存在したが、1931年には、その場所に79校の独立上構学校（男子校、女子校）が建った。だが、これらは名実共に選抜校であり、それらの占める割合は、プロイセン全中等学校のうち校数で8.6%、アビトゥーア合格生で5%を占めたに過ぎなかった、とする<sup>1</sup>。

リューテン上構学校は、プロイセンで100番目に設立された最後の上構学校である。これが立地するリューテン町は、ライン地方のカトリック農村だった。上構学校の創始者ハンス・リヒャート（Hans Richert, 1869-1940）は、地方農村青少年に「ドイツ的教養統一」を実現し、その健全な活力を吸い上げようとした。リューテン上構学校は、そのためのまさに格好の条件を備えていたと言える<sup>2</sup>。

- 1 Vgl. Zymek, Bernd: „Expansion und Differenzierung des höheren Schulsystems“, in: Langewiesche/Tenorth (Hrsg.): Handbuch der deutschen Bildungsgeschichte. Bd. V. 1918-1945, München: Beck, 1989, S. 171-172.
- 2 「中等学校の改革は…統一学校体系の中の中等学校の位置づけというところに改革の本質の意味がある。つまり中等学校を国民学校および大学と有機的に結合するということは、中等学校をドイツの教育制度の全体運動の中に組み込むことを前提としているからである。この全体運動への組み込みは、単なる組織的組み込みという類のものであってはならず、一つの理念的結合を意味するものでなくてはならない。それは内容的には国民学校とも接近するということの意味しているのであって、このような中等学校で将来の国民学校教員が教養を身につけるといことがすでに現実の中に意義深く出現しているのである」。Die Neuordnung des preußischen höheren Schulwesens. Denkschrift des Preußischen Ministeriums für Wissenschaft, Kunst und Volksbildung. 1924, Berlin: Weidmannsche Buchhandlung, 1924, S. 3-4. (プロイセン文部省（編）（小峰総一郎訳）「プロイセン中等学校制度の新秩序」『中京大学教養論叢』35(1), 1994, 9, p. 282-283. 「新秩序」の起草者はプロイセン文部参事官ハンス・リヒャートである。[後述])

だが、現実はどうであったか。ツィメクが述べるように、師範学校後継学校たる当校もまた、「名実共に選抜校」であったことは間違いない。第①回の研究ノートで、筆者（小峰）は次のように述べた。

…生徒たちはリュートン町よりも近在から多く進学した。中には、ある雪の朝、馬と橇とで2時間半も苦闘して登校した女生徒もいた。生徒の進学動機は、ドイツ高等学校（＝「ドイツの教養」）という民衆的な学校理念、ないしそれを修得して郷土の小学校教員になるというのではなしに、ここを經由すればアビトゥーア（＝大学進学）に至れるという、今までにはなかった専門職キャリアへの道であった。生徒そして親を惹きつけたのは、内容ではなく「制度」にあった<sup>3</sup>、と。

この評価は、その後に若干の考察を行った今も変わらない。かつてリュートン師範学校時代には、近在からの生徒はリュートン町内に下宿して修学し、卒業後は近隣のカトリック国民学校教員となっていった<sup>4</sup>。だが、上構学校がそれまでの師範学校にない「大学」への道を保証したために、リュートン上構学校は次第に完成教育機関＝師範学校から大学への「通過」教育機関（ないし上昇機関）として「名実共に選抜校」となったと言える。ペゲラーの回想にあったように、当校に志願した者のうち1/4が不合格になっていた<sup>5</sup>。

生徒の出身層が中産層にあることはさきに触れたところであるが(第①回)、これをさらに生徒家庭の経済状況に分け入って見てみよう。生徒数は、次表に見られるように開校以来着実に「増加」した。しかしこれは、その裏に一定数の落第、退学、また編入があつての数なのである（落第率は毎年50%だったという）<sup>6</sup>。

表1-1. リュートン上構学校生徒数（1926-1930）

年度	1926/27	1627/28	1928/29	1929/30	1930/31
入学	20	23	19	17	23
総数	20 (男16, 女4)	40	55	68	91

(Vgl. Bracht, S. 296.)

- 
- 3 小峰「ライン地方のあるギムナジウム（1）」『中京大学国際教養学部論叢』7(1), 2014, p. 14.  
 4 Bracht, Hans-Günther: Das höhere Schulwesen im Spannungsfeld von Demokratie und Nationalsozialismus: ein Beitrag zur Kontinuitätsdebatte am Beispiel der preußischen Aufbauschule. Bern: Peter Lang, 1998, S. 273.  
 5 Pöggeler, Franz: Aufgewachsen in zwei Reichen: Kindheit und Jugend 1926 bis 1945, Bern: Peter Lang, 2009, S. 77-96.  
 6 Vgl. Bracht, S. 321.

表1-2. 生徒数 [学年別] (1934-1937)

学年\年	1934/35	1935/36	1936/37	1937/38
OI	9	15	12	17
UI	15	11	11	16
OII	10	15	20	42
UII	29	27	25	37
OIII	26	26	37	30
UIII	24	38	37	23
計	113	132	142	165
うち女子	27	35	31	46

## 宗 派

カトリック	106	126	136	157
福音派	7	6	6	6
非宗派	-	-	-	2
計	113	132	142	165

(Vgl. Bracht, S. 440.)

退学理由の大半は経済問題である。学費は年間200マルク（ライヒスマルク：RM）だったが、1930年からは240マルクに引き上げられた。だが、世界恐慌（1929）の時期にこの地の農家は窮乏化、生活は困窮した。1929年の全生徒68名中、学費の減免は次の如くである<sup>7</sup>。

全額免除	3
半額免除	5(夏学期), 4(冬学期)
家族割(25%減)	12
(50%減)	13
奨学金	7
<hr/>	
合計	40(夏学期), 39(冬学期)

つまり生徒の58.8%、約6割の生徒が学費減免措置を受けていたわけである。授業料以外にも生徒は通学費、そして下宿生であれば相当の下宿代を負担しなくてはならない（寮＝私邸への公費補助<sup>8</sup>が備わったのは外部生が増大した1935年のことだった<sup>8</sup>）。かかる状況下では、家計の困窮は即、退学に結びつかざるを得なかった<sup>9</sup>。

<sup>7</sup> Vgl. A. a. O., S. 297.

<sup>8</sup> Vgl. A. a. O., S. 443-444.

この困難を踏み越えて生徒また親を修学に駆り立てたもの、それは「ギムナジウム」修学を通しての大学への道、地位上昇への期待であったと言わざるを得ない。ブラハトの叙述で興味深いのは、1932年のアビトゥーアに際し、将来の小学校教員を志望する者ゼロ、との指摘である<sup>10</sup>。また、新たに女子に開かれたギムナジウム教育機会を経て大学に学んだ3名女子のうち、2名が博士となっている<sup>11</sup>。女子の退学率の少なさと、全体のアビトゥーア合格者の少なさを考慮に入れると（最初の3年間は30%、20%、40%だった<sup>12</sup>）、旧師範学校になかった進路が生徒を上構学校に惹きつけたと言ってよいであろう。

これらを総合して見たとき、ライン地方の一地方農村のリューテン上構学校は、従来の師範学校よりもさらに、農村中産層の学校になったと言える。「大学への道」を保証したために、生徒の出身地域はより広域化し、学校維持のためには都市のギムナジウム落第生を編入生として受け入れた。上構学校は、町の中産層たる非大学卒官吏および自営農子弟の学校であり続け、下層階層の修学は、経済がこれをきびしく排除したのである。

## 2. ドイツ学カリキュラムとの関係



ドイツ高等学校の創始者、プロイセン文部参事官  
ハンス・リヒャート（Hans Richert, 1869-1940）  
[写真出所：Margies: Das höhere Schulwesen  
zwischen Reform und Restauration, 1972.]

次に、上構学校の「ドイツ学」カリキュラムの成果如何につき考察してみよう。

リューテン上構学校は「上構学校型式の邦立リューテンドイツ高等学校」である。

「上構学校」（Aufbauschule）は国民学校（初等学校）の「上に構築された」（Aufbau-）学校

9 ある生徒の親は軸回し工として月100マルクを稼いだ。しかし次第に収入が減り、1931年に失職した。当局から40マルク補助を受けても、20マルクの学費[4半期ぶんであろう——小峰]が払えない、と古リューテン行政庁に訴えた。当局は、子どもを学ばせたいなら工場に行けと答えたのみ。「金持のためにある中等学校に単純労働者の子弟が通うのは、神の秩序ではなかった」と生徒は回想する。（A. a. O., S. 323.）

10 A. a. O., S. 366.

11 A. a. O., S. 367

12 A. a. O., S. 321.

(Schule) という、短縮型の「学校型」を意味した。[短縮型の中等学校として、実科ギムナジウム型 (Realgymnasium: ラテン語と2近代語必修, 近代カリキュラムのギムナジウム) と高等実科学校型 (Oberrealschule: 2近代語必修, 理系カリキュラム), それに後述のドイツ高等学校型 (Deutsche Oberschule: 2外国語必修, ドイツ文化のカリキュラム) とがあった (ギムナジウム型の上構学校はない)]。これは、当時存在した同じく6年制の中等学校である「実科学校 (Realschule)」からは大学進学ができないのに対して、上構学校から大学進学が可能であった(アビトゥーア試験の実施権をもつ)。その意味で、上構学校は従来のエリート学校であったギムナジウム (2古典語=ギリシア語・ラテン語必修, 文系カリキュラム) と同等である。エリート子弟が、それまで併設の予備学校から直接ギムナジウムに進級したのに対し、同校は大衆教育機関たる国民学校を経て入学、6年後これを卒業すれば(アビトゥーア試験合格) 大学進学が可能となったのである。カリキュラムは国民学校と基本的に同じで、外国語は2近代語である(英語とフランス語を念頭に置いた)。ドイツにはそれまで各地に6-7年制の「師範学校」(Lehrerseminar) が存在して初等学校教員養成を担っていた(宗派別)。上構学校が6年制の「初等後」の学校であることから、人々は上構学校は「師範学校の後継学校」と受け止めた。そして事実、多くの地域で「師範学校」を廃止して、これを「上構学校」に移行させていたのであった。(リューテン上構学校もそうである。)

他方「ドイツ高等学校」(Deutsche Oberschule) は、それまでのギムナジウムがギリシア語・ラテン語を必修とし古典文化を主内容とする中等学校であるのに対し、「ドイツ文化のカリキュラム」を主内容とする学校という教育理想、教育内実から生まれた中等学校である。これはプロイセン文部参事官ハンス・リヒャート (Richert, Hans 1869-1940) による、保守・復古の教育改革の中で創出された第4の正系校種だった。「ドイツ文化を主内容とする」ということは国民学校のカリキュラムが中心を成すということであり、古典外国語(ラテン語・ギリシア語)は必修とせず、外国語負担を軽減してドイツの歴史・文化、ドイツ哲学を重視して、ギムナジウムとの差別化を図ったのである(それでも2外国語必修)。

わが国のこれまでの研究においては、上構学校とドイツ高等学校とが明確に区別されて両者の発展が独自に記述されてきたとは言えず、ときに2つは併置されたり、あるいはまた同一のもののように捉えられたりしてきた<sup>13</sup>。その理由は、当のドイツにおいて上構学校、ドイツ高等学校

13 そのような中、阿部重孝は、1930年の『欧米学校教育発達史』において、両者の違いと特性を明確に区別して論述している。ただ残念なことに、2校種創出の根拠たるリヒャート改革およびその結果提起された「教則大綱」と「覚書」の説明が十分ではない。そのために、ギムナジウムを始めとする全中等学校が、自校種の独自性をドイツ的な思想世界と結びつけて理解しようとするリヒャートの「ドイツ的教養統一」の思想、そしてこれの最大の機会である「哲学講読」の時間を1924年カリキュラムから落としてしまっている。(筆者(小峰)は、リヒャート改革とドイツ高等学校・上構学校を理解するため、さきにリヒャート覚書とドイツ高等学校・上構学校教則を資料として訳出した。<プロイセン文部省(編) (小峰総一郎訳)「ドイツ高等学校・上構学校教則大綱」『中京大学教養論叢』第34巻第1号, 1993, 7>、

の全容が漠としており、それらについての研究もごく断片的だったからである<sup>14</sup>。

筆者(小峰)は、ベルリン、ノイケルンの「カイザー・フリードリヒ実科ギムナジウム」Kaiser-Friedrich-Realgymnasium でフリッツ・カルゼン(Karsen, Fritz 1885-1951)によって展開された新教育を研究する過程で、自由な教育実践を保障する舞台としての「上構学校」・「ドイツ高等学校」に行き当たった<sup>15</sup>。ただ、これは都市における「上構学校」という例外的な展開であって、上構学校は本来大都会ではなく、地方農村の立地を前提とした。ギムナジウム生徒が故郷を離れ、寮などに寄宿しては、都市の生活と文化に病んだがり勉・外国文化一辺倒を生み出してしまふ。そのため、これまで中等教育機会から閉め出されていた生徒、すなわち、家から通うことしか許されない才能と意欲のある地方青少年の修学を念頭に置いていた(地方青年の「健全な生命力」の吸い上げ)。筆者はその後、プロイセン文部参事官ハンス・リヒャートの人物研究、ならびにワイマール時代プロイセンにおける中等学校改革の特徴を描いてみたのであるが<sup>16</sup>、ブラハトの上構学校研究は、まさにこのリヒャート改革が狙いとした地方農村都市で、上構学校教育がどのように展開されたのかを、事例に即して解明した一大研究成果なのである。とりわけ、上構学校教育の中心的カリキュラムである「ドイツ科」(ドイツ学)の展開を具体的に知ることができ、これまでの研究上の欠落を埋めるものと言える<sup>17</sup>。

さてその「ドイツ学」カリキュラムであるが、結論的に言えば、ハンス・リヒャートが目指したような「ドイツ的教養統一」(諸文化を、ドイツ語ドイツ文化を軸に統合するという理想。

<プロイセン文部省(編)(小峰総一郎訳)「プロイセン中等学校制度の新秩序」『中京大学教養論叢』第35巻第1号, 1994. 9>。これら新校種の時代的必然性と、ドイツ国内の賛否両論は阿部「新しいドイツの高等学校」に詳しい(『阿部重孝著作集 第六巻』日本図書センター, 1983, p. 436-453所収。原著1923年)。

ハンス・リヒャートについては、Dieter Margies: Das höhere Schulwesen zwischen Reform und Restauration: die Biographie Hans Richerts als Beitrag zur Bildungspolitik in der Weimarer Republik. Neuburgweier/Karlsruhe: Schindele, 1972, が、唯一体系的な研究書である。

- 14 リタ・ウェーバーは上構学校を教員養成史の中に位置づけて考察している。Weber, Rita: Die Neuordnung der preußischen Volks[s]chullehrerbildung in der Weimarer Republik: zur Entstehung und gesellschaftlichen Bedeutung der Pädagogischen Akademien. Köln; Wien: Böhlau, 1984. (Studien und Dokumentationen zur deutschen Bildungsgeschichte, Bd. 26)
- 15 小峰 総一郎/フリッツ・カルゼン『現代ドイツの実験学校』明治図書, 1986, 参照。
- 16 小峰「ハンス・リヒャートとプロイセン中等学校改革」日本教育学会『教育学研究』63(4), 1996, 参照。
- 17 ライナー・ベッスリングの「ドイツ科」研究は、「ドイツ・ゲルマニスト連盟」(1920年に「ドイツ的教養協会」Gesellschaft für deutsche Bildungへ改称。同年の全国学校会議に出席)の代表者ヨハン・ゲオルク・シュプレングル(Johann Georg Sprengel, 1863-1947)の「ドイツの倫理」に基づくドイツ語作文を取りあげている。彼は、生活圏からの体験を掘り起こし、読み、話し、作文することを通して「ドイツ的倫理」を自覚させるとする。ドイツ的倫理形成授業の研究ではあるが、事例はごく断片的である。Bessling, Reiner: Schule der nationalen Ethik. Johann Georg Sprengel. Die Deutschkundebewegung und der deutsche Germanistenverband, Frankfurt am Main: Peter Lang, 1996, S. 181-182.

下図参照)<sup>18</sup>は困難だったと言わざるをえない。

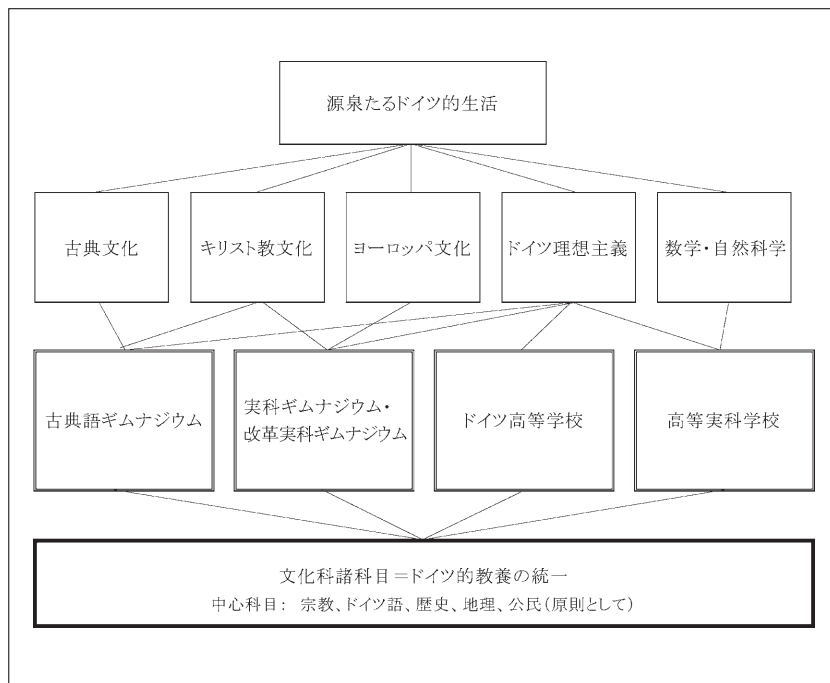


図1-1. リヒャートのドイツ的教養統一と学校型

(Schmoltdt: Zur Theorie und Praxis des Gymnasialunterrichts  
(1900-1930). 1980, S. 110.)

リューテン上構学校は、住民の受け止めとしては地方英才を集める短縮型の「ギムナジウム」であることから（校種上は「ドイツ高等学校」）、カリキュラムにラテン語を置いた（ドイツ文化重視の「ドイツ高等学校」でありながら）。アビトゥーア合格を高める目的のもとで、また地元のカトリック教会の要求もあって、ラテン語教育の優位は揺るがなかった。リヒャート教則に盛り込まれた科目の合同なども編成することはできなかった。生徒の探究を重視した協同学習は、いくつかの研究グループ（Arbeitsgemeinschaft）を実施することができた。しかし、理科方面の科目では、生徒の探求が尊重されたが、ナチ時代のドイツ語グループ学習では、哲学・ドイツ語教員ハンマーシュミットがナチ著作を扱い（「ゲルマン前史」（1933夏）、「我が闘争」（1933/34冬））学校のナチス化の急先鋒であった（第④回、⑤回参照）。

むしろ、ドイツ学カリキュラムに果敢に挑んだ具体例（成功例）としては、第2代校長フルック（Dr. Hans Fluck）の取り組みを挙げうる（在任 1930-1932）。

18 Schmoltdt, Benno: Zur Theorie und Praxis des Gymnasialunterrichts (1900-1930). Eine Studie zum Verhältnis von Bildungstheorie und Unterrichtspraxis zwischen Paulsen und Richert. Weinheim/Basel: Beltz Verlag, 1980, S. 110.



## 授業内容

### 1. 特徴

- ・ドイツ語の授業は、学校の教則と教員の傾向によって内容が決まった。
- ・OIの目標はドイツ理想主義<sup>19</sup>。これに副次テーマも入る。

### 2. 読書教材

- ・1931/32 OIのドイツ語（フルック校長）

- ①授業教材——ゲーテ（ファウストI, 概略II），ハイネ（政治詩，散文），シュミットボン（7つの峰のかなた），現代ドイツ散文，印象主義，象徴主義。ツィーグラ（田舎守備兵クリル），R.ワグナー（さまよえるオランダ人，タンホイザー（UI），ニーベルンゲンの指輪，マイスタージンガー），表現主義，戦争。
- ②個人教材——ゲーテ（ライネケ狐），ケラー（マルチン・サランダー），グリルパンツァー（嘘つきへの痛み），インマーマン（宮廷），コルトゥム（ヨブシアデー），G.ハウプトマン（選択でウェーバー，ハネルの空への旅，選択でビーダーの毛皮，選択で御者ヘンシエル，選択でバラ・ベルント）。
- ③私的領域——ドラマ，演劇，ハウプトマン，またゲーテ，ケラー，グリルパンツァー。

### 3. 親民族主義（eher völkische Richtung）でなく，労働者的でもない

- ・読書教材を見るとき，他校で普通の親民族主義的なもの——フレックス，グリム，ヨースト，また，クラリスト——が突出している訳でなく，又，労働者文学もない。
- ・国民的保守的自己理解（national-konservatives Selbstverständnis）——ドイツ的な内容，田舎・郷土の文学，政治社会的テーマを歴史的に扱う。市民の自己理解は田舎の牧歌と結合している。

### 4. クラス作文テーマ，宿題テーマ（1931/32）

- ・フルックの指定したクラス作文テーマ，宿題テーマ

第一課題：クラス作文（テーマ選択）

- a) 新学年に思う
- b) ゲーテ・ファウストの復活祭散歩は私に何を語るか？
- c) 私が1931年のモーツァルト記念日に演説したいと思うこと

19 「第一年級ドイツ語は，教育活動の中心にドイツ的生活の最高の教養時代たる「ドイツ理想主義」を置く。第一年級ドイツ語はドイツ理想主義をその精神的諸前提の中から理解し，それが全生活領域に対してもっている根本的意義を明示するものとする。また，ドイツ理想主義の大作家，思想家をできるだけ深く掘り下げて理解することに努め，古典時代から現代までの時代を理解するための架け橋とする。…第一年級上級の目標は「ドイツ理想主義」を如上の精神運動の完成，統合として明らかにすること，ならびにその偉大な代表者——中でもゲーテ，シラー——がドイツに及ぼした大いなる影響について理解させることである。そこで授業では個々の作品の講読に留まることなく，各作品を作家の生涯や全時代背景と関連させて理解することが必要である。…」〔ドイツ高等学校・上構学校教則大綱（1924）〕I. 文化科 第一年級ドイツ語，小峰訳（1993），p.304-305.

d) アーサー・シュリッグのモーツァルト史『ウエルギリウスの墓にて』に即し1770年頃のヨーロッパ意識の中の古代

(5 短時間授業)

第二課題：宿題（テーマ選択、但し教師の許可つき）

- a) パン穀物によるドイツの補給
- b) 日常生活から
- c) リューテン耕地の土質
- d) 現代農業の状況
- e) 石祝いに思う
- f) 鉄製作工場に行く
- g) 炭化水素化合物とその意義
- h) 飛行機の意義
- i) 鉄道の未来
- j) ゲーテ『ファウスト』第一部の歌

第三課題：クラス作文（テーマ選択）

- a) 現代生活で我々に特に目立った現象は何か？
- b) 日常生活で人はどのように勇気を示すか？
- c) 友に何を感謝するか？
- d) 貴方はファウストの友人になりたいですか？（ファウスト第一部）

(5 短時間授業)

第四課題：現代ドイツ詩の一節を選んで様式を探究せよ

(5 短時間授業)

第五課題：私の人生、私の教育歴（6 短時間授業）

第六課題：エルンスト・マッハの実証哲学完成への道、デトレフ・フォン・リーリエンクローンは実証哲学者か？

第七課題：アビトゥーア作文（5 1/2 時間各々60分）<sup>20</sup>

【ブラハト】 作文テーマは精確に叙述されるよう選んである。生徒のテーマ選択あり。よく選ばれたもの：ゲーテ・ファウスト1b, 2j, 3d, A4など。<sup>21</sup>

<sup>20</sup> Vgl. Bracht, S. 330-334.

<sup>21</sup> A. a. O., S. 334.

フルック校長は、リューテン上構学校のアビトゥーアを高めるために地方学務委員会が送り込んだ人物だった。この要請に応えるため、彼は、教員組織、授業内容などの上構学校教育の内部充実とともに、他方で積極的に学校を地域に開いていった。地域住民に音楽や文化の集いを設け、父母、地域住民の生活と信仰に立脚した学校づくりを進めたのである（フルック自身、ピアノの名手であった）。ナチ時代に左遷された彼は、カトリック主義の立場からナチズムに不服従を貫いた。その彼の授業は、ドイツ理想主義を軸として、諸文化の統合をめざすヒヤート文化科構想を、リューテンの地元の要素も取り入れて実践したのと言ってよい。

### 3. ナチス体制下のリューテン上構学校



プロイセン文部大臣・初代ライヒ教育大臣  
ベルンハルト・ルスト (Bernhard Rust, 1883-1945)  
[写真出所：ドイツ Wikipedia]

ブラハトの研究は、ナチス体制下の中等学校教育研究としても大変示唆に富む。何より、これまでドイツにおける研究において断片的にしか研究されて来なかった「ナチス教育学」の実践展開をうかがうことができるからである。それは以下の3つのレベルから成る。

- ①ナチスカリキュラムとその展開——とりわけ生物・人種科、歴史、地理・地政学、ドイツ語
- ②学校行事、生徒活動——とりわけ民族政治科実習 (Nationalpolitische Lehrgänge)、学校におけるナチス青少年団体活動、協同学習、志操教育、ナチスのアビトゥーア試験介入を含む学校の「政治化」
- ③教員団、地域と学校——個々の教員の「ナチ化」(信仰と「政治」との対立葛藤・「調停」)、教会・地域と学校との関係

#### (1) 「ナチス教育学」, 「ナチスカリキュラム」

初めに日本との関係に触れておこう。

戦前わが国国制は天皇制国家体制であり、成熟した市民社会を基礎に築かれた近代国家ではな

かった。その教育研究は、封建遺制根強かつて立憲君主制をとったプロイセン・ドイツと「近しかった」。とくにプロイセンが、教育と軍事により近隣諸国を支配し強大化する姿は、日本の行き道と重ねられたと言える<sup>22</sup>。1933年のナチス体制成立後の日本の教育研究は、ナチス教育の一面的な紹介・礼賛にあふれていた<sup>23</sup>——「同盟国」ドイツ（日独防共協定の締結は1936年（昭和11年）11月25日である）の国家教育、愛国心教育、労働奉仕、青少年組織、ヒトラー・ユーゲント、等々——。ところで、そもそもこの「ナチス教育学」とは一体いかなるものであるのか。1942年の雑誌『ドイツ』は「ナチス教育特集」を組んで、ドイツの学校教育、教員養成、成人教育・社会教育、政治教育、国防教育から植民地政策等にまで及ぶ広汎な内容を扱っている<sup>24</sup>。だが、そこに「ナチス教育学」とはいかなるものかが必ずしも明瞭であるという訳ではない。同誌はベンツェの「国民社会主義教育の目的」を掲載するが、これが「ナチス教育学」を説明しているとは言い難い。「国民社会主義教育（ナチス教育）」は次のように描かれるのみである。

「目的 国民社会主義教育は若い人々に彼等が国民の一員としてドイツ国民の生活や国家及び社会を維持し、向上せしむる能力を付与するのである。これが為には自然の遺伝及び人種法則の意義に立脚して、個々人の健康を増進させる事が必要である。健康を増進させる事は単に肉体のみならず、性格又は精神にも少なからず及ぶのである。肉体と霊及び精神の先天的の神聖な均衡は——尤もこの均衡

22 ドイツが19世紀末から20世紀初頭にかけて行なったポーランド住民の同化政策は、「帝国」日本の朝鮮人、中国人同化政策のモデルをなしたと言える。朝鮮總督府〔編〕『ポーゼン州國語教育に関する調査報告』〔朝鮮総督府〕、1913、参照。調査者は当時ドイツ留学中の保科孝一である。日本の植民地同化政策については駒込武著『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店、1996、ならびに浅野豊美『帝国日本の植民地法制—法域統合と帝国秩序』名古屋大学出版会、2008、が雄渾である。

23 たとえば百々巳之助・景山哲夫『ヒトラー・ユーゲント』刀江書院、1938；下松桂馬『平和の武装獨逸労働奉仕制度：青年教育運動の再建』刀江書院、1937；新見吉治著『ナチス祖國愛の教育』三友社、1935、など。

24 雑誌『ドイツ』1942年11月上旬号の内容を示すと以下のごとくである。

瀧口潔「國運の消長と教育制度——巻頭言」／巖山政道「日本に於ける國民組織の特徴」／石橋長英「ドイツ植民地の發展と植民政策」／ルードルフ・クラウスミューラー「國民社會主義労働動員の枠内に於ける全面的後進者指導」／ベンツェ「國民社會主義教育の目的」／安藤堯雄「ドイツの政治教育」／山本政治「ドイツに於ける教育者の養成に就て」／「一九三六年のドイツ學制改革（フランクフルターツァイツング紙所掲）」／平沼良「ドイツ學校教育」／多田鐵雄「ドイツの社會教育」／マッテウス「ドイツに於ける成人教育事業」／黒澤得男「大森獨逸學園を觀る」／平沼良「ドイツ國民學校參觀記」／原田瓊生「反共十字軍夏之陣」／オット・モスドルフ「ドイツ國防軍指導法」／ウエルネル・コルラート「榮養整備論」／内田昌夫「月間國際情勢展望」／秦禮介「經濟時事 ドイツ労働者對策」／秋吉元作「現代ドイツ作曲界概観」／「世界の動向 ドイツ情報 日本＝獨逸＝西亞＝佛蘭西＝中南米＝ソ聯＝米國・英國」〔以下略〕

これに対し、文部省はドイツにかかわる教育調査を周到に行い、これを報告・公刊している。

文部省教育調査部〔編〕『歐米に於ける中等教育制度改革問題』文部省教育調査部、1935。

文部省教育調査部〔編〕『獨逸の高等學校』文部省教育調査部、1941。

ちなみに外務省は、ヨーロッパ、ドイツと東京間で電信・書簡による報告、連絡を緊密に取り合い、外交を展開している。（筆者（小峰）は、かつての、ポーランドにおけるドイツ系少数民族の教育問題にかかわり、それらデジタルアーカイブのいくつかを参照した。（アジア歴史資料センター <https://www.jacar.go.jp/about/index.html>）所収）

は被造物に関係なき世界観や教育理論の支配の下に攪乱され、又我々はこの均衡に背き、就中肉体や性格を等閑に付し霊及び精神を狭めたり歪めたりするのであるが——鍛錬に依って一定の促進度で原状に復され、維持され、強固にされるのである。それ故凡ゆるドイツの少年少女は明朗な澆刺とした智力を有する清い心と強固な意志を健全にして人種的に立派な肉体の中に持ちたいといふ理想に向って進むのである。然し之等の特質は真の協同体意識がこの特質に融合する時始めてドイツ国民にとって価値あるものとなるのである。…自己の利益が社会の福祉を害ふなら自己の利益はヒトラーが吾々に生活の範を示した所謂、公益は私益に優先すといふ根本命題に戻らねばならぬ。…凡てのドイツ人は運命に縛られた一家族を為すが故に、各個人は国民の一員として全員の安危に対して共同責任を負ひ、従って全力を盡して自国民に奉仕せねばならぬといふ精神を養ひ、之を強要せねばならない。…さればドイツ青少年教育及び凡ての教育の目的は総じて密接に協力し、包括的な二重のものである。

1. 人種的に健康にして有為の個人養成教育

2. 社会の一員への準備教育（国民教育）

両者は別個に分離する事は出来ず、相互に提携して継続的に目的を達成して行くのである。両者を分離して説明せねばならぬとしても、両者が密接不離の関係にある事は後天的に於て常に気付くであらう。…」<sup>25</sup>と。

「ナチス教育学」, 「ナチスカリキュラム」は、ディシプリンとして体系化されることは困難であった。それは、ときにベンツェにより、またシュトゥッカートによって、ヒトラー『我が闘争』の諸言説を引用して授業方針、青少年政策、教員養成、学校制度と関わって述べられたが、これをそのまま「ナチス教育学」, 「ナチスカリキュラム」と言うことはできない<sup>26</sup>。例えば、民族政治科実習（Nationalpolitische Lehrgänge）が、学校教育を超える「ナチス教育学」の典型であるとされたが、これは<学校>か<隊列（軍隊）>かの対立の中、試行数年で「禁止」となっている。「ナチス教育学」の軸たる「人種学」, 「歴史学」, 「地政学」も、学問的信憑性・体系性に貫かれて

25 『ドイツ』11月上旬号（ナチス教育特集）、日独出版協会、1942、p. 30-31.

26 ヘルマンの『教育学辞典』（Hehlmann, Wilhelm: Wörterbuch der Pädagogik. Stuttgart: Kröner, 1971.）にはナチス教育に関わる重要項目は殆ど見出せない（ヒトラー、強制的同質化 Gleichschaltung、ヒトラー・ユーゲント、人種学、ナチズム、ナボラ等々）。その後継書であるバームの『教育学辞典』にはヒトラー・ユーゲント、ナチズムの記載はある。ただ「ナチズム」（「ナチス教育学」）は次のように記述されるに留まる：「ワイマール共和国の反民主主義思想<非合理主義・反知性主義、卑俗な生の哲学、基本概念としての民族・生活・グループ・同盟・有機体>から生まれたナチズムは、新教育の個人主義を批判し、他の独裁同様に全体的な教育国家をも目指した」と。そして、ナチス教育学は、国家を誇りとして（ヒトラー）、人種として健康な人間、冷たい知性より情念的な新しい政治の人間の形成を目指す；1938年教則大綱はそのような「ナチ的人間」の形成を謳っているとして、科目の特徴を記し、教育諸政策——校外青少年組織、教育行政（ライヒ教育省創設1934）、学校制度、教員養成、大学自治剥奪、を述べる。バームによれば、1938年教則が一応の「ナチス教育学」, 「ナチスカリキュラム」との理解である。Böhm, Winfried: Wörterbuch der Pädagogik. 12., neuerfasste Aufl. Stuttgart : Kröner, 1982, S. 381-382.

いたとは言えない（第⑤回参照）。さりながら、「ナチス教育学」を今回行ったリューテン上構学校の事例に則すと、以下の構造総体と考えることができる：

- ①ワイマール保守思想，反ヴェルサイユ，外地ドイツ人運動等を与件としてヒトラーのまとめた『わが闘争』を始点とする
- ②これに基づく人種学，地政学，歴史学を中心とした「ナチスイデオロギー」生成
- ③このナチスイデオロギーを軸にした人間形成計画（ナチス教育学・ナチスカリキュラム。教育制度，教員養成等を含む）
- ④家庭，学校，青少年団体，労働組織，軍隊等を通したナチス教育の実践貫徹
- ⑤党と祖国に献身する「ナチスト青少年」の形成

以上を図解すると次のようになろう（小峰構造図）。

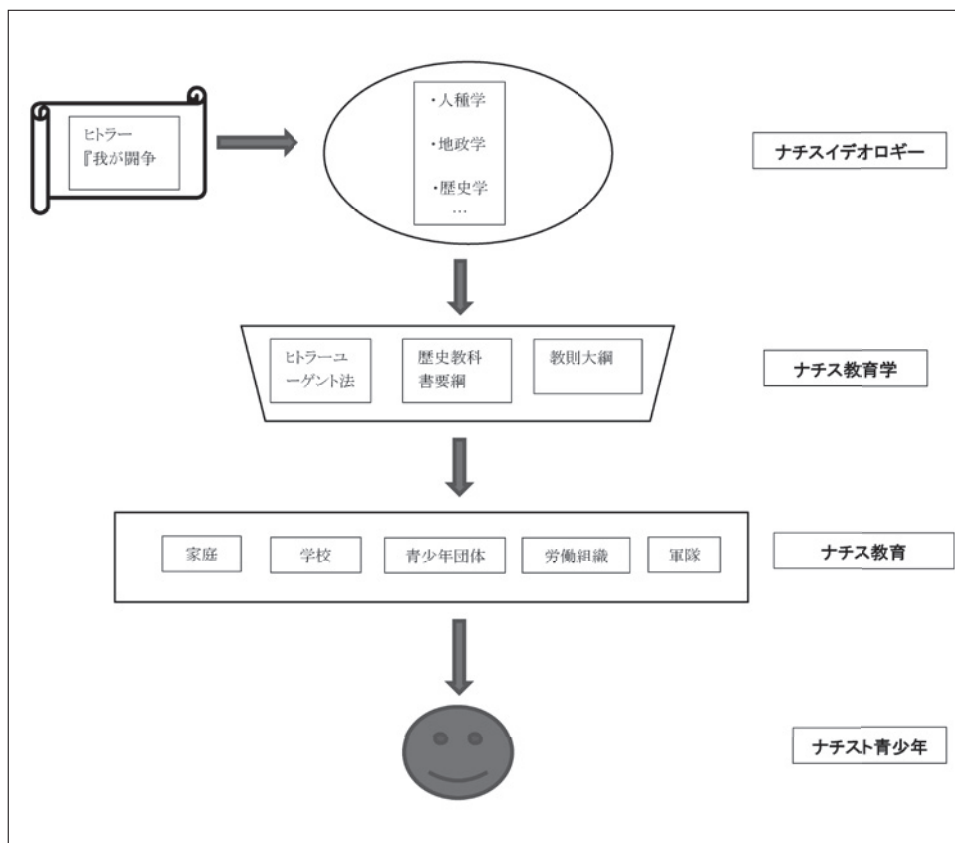


図3-1. ナチス教育構造図（小峰）

ナチスイデオロギー，ナチス教育学を中核とし；これを取り囲んで教育の組織編成（教則編成，

青少年組織化，統一学校制度，男女共学，上構学校中心の中等学校制度，教員養成大学新設，ナチスエリート校創設，等々）が準備され；それらシステムがこれまでの教養エリートとは異なる庶民階層出自のナチ・エリートによって専管される；授業はナチス教員団体（「ナチス教員連盟」）の統制のもとに定型化され，簡易教材使用強制がそれ以外の授業（探究的学問的な授業，生徒活動を尊重した授業と学校生活）を排除する——という全体構図，これら〈総体〉が「ナチス教育」として「確立」されて行ったのだと言える。（第④，⑤回参照）

## （2）学校の態勢，生徒の活動

「ナチス教育学」は〈学校〉の陶冶（Bildung）を〈社会〉 [= 民族共同体（Volksgemeinschaft）] における教育（Erziehung）に代置した（「ナチス教育学」における教育（Erziehung）は「錬成」ないし「教練」に近い）。

ナチ期のリューテン上構学校教学も，必然的に知識エリートの〈陶冶〉から民族共同体に奉仕する〈ナチ的人間錬成〉に取って代わられたのである。教則（1938）は言う；

「あらゆる真の教養は生から生まれる；その生は生を通してのみ点火されうる。ナチズムは教育と陶冶の全体系に代わって生と行動の優位を主張する；それが偉大な全文化発展の法則だからである。政治的行動が新秩序の生みの親である…」と<sup>27</sup>。

学校の授業と教学態勢，生徒活動は，挙げてこの目的に向けられた。

筆者（小峰）は先に，「民族政治科実習」（Nationalpolitische Lehrgänge）に注目して，この試行がなぜこのライン地方において早期大々的に実施されたのかを問うた。それは，当地が「国境地帯」であったからである（第③回参照）。そしてこの国境地帯では，フランス軍内の植民地出身兵（黒人）による現地女性への暴行陵辱事件が頻発し，これへの反対運動が広汎に展開されていた（「ラインラントの雑種」に対する「黒い汚辱」キャンペーン）。知性教育中心の〈陶冶〉よりも，民族共同体に奉仕する〈ナチ的人間錬成〉への希求は，国境地帯の抱える現実からの要請に合致していたと言える。（第④回参照）

郷土の詩人マリア・カーレは，同校の宗教教師である弟（ヴィルヘルム）とは異なる形で上構学校教学に深く関与した。彼女は，ブラジルで祖国ドイツの敗戦に遭遇している。外地に暮らす「外国ドイツ人」への思いは，自らの経験と重なっていた。帰国してのち，彼女は「外地ドイツ人協会」に加わり，外地ドイツ人への支援活動，「民族政治科実習」を通して同校の授業，生徒活動に熱烈に参加したのである（第②回参照）。

27 Erziehung und Unterricht in der höheren Schule. 29 1. 1938, Berlin: Weidmann, 1938, S. 10–11.

かつてのドイツ領に留まった民族ドイツ人、第一次世界大戦敗北後にデンマーク、ポーランドの中の少数者・少数民族となった「外地ドイツ人」が、ドイツ語・ドイツ文化の教育を求める「文化自治」を筆者はさきに研究した<sup>28</sup>。この「特に新生ポーランドにおける」ドイツ系少数民族は、一方では祖国帰還を押し留められた存在であり<sup>29</sup>、他方で、彼らがポーランドに留まることが「ドイツにとって東部国境修正の要求を強化することにつながる」存在とも考えられたのである<sup>30</sup>。

リューテン上構学校にける国境地方についての学習は、同地の「外地ドイツ人協会」(Volksbund für das Deutschtum im Ausland)と結んで外地のドイツ系少数民族支援、彼らの文化自治を推進するものだった。これが、ナチス体制成立後には、ヒトラーの生存圏構想、地政学戦略となって、ドイツの中欧支配と結びつくのであった。生徒らは、授業の中で、研究グループの中で、さらにまた校内に組織されたヒトラー・ユーゲント活動を通して、ドイツの運命に加わることを自らの責務と自覚して行ったのである。

### (3) 生育歴作文——ナチス教育の「成果」

このことがアビトゥーア生の「生育歴作文」にうかがえる。生育歴作文とは、アビトゥーア受験を前にして、ドイツ語作文の時間に自己の生育歴を綴るものである。生徒はそれまで、家庭や学校生活、交遊に即して自己形成史を綴っていたのであるが、「1933年革命」を体験しナチス錬成教育を重ねてきた生徒は、次第に党(ナチ党)と民族の運命に自分を重ねてゆく。ブラハトの掘り起こした生徒作文からいくつか紹介してみよう。

#### A. 1934年アビトゥーア生 [1933年12月の生育歴作文。大要]

1934早春のアビトゥーア試験に向けて作文。1931、1932年と明らかに異なる点——ナチズムと関係する記述が明瞭である。ときに詳細に綴られている。

①ドルトムントのSA行進でナチズムを身近に感じた。生への勇気、民族への奉仕だ。

②ドルトムントのSA行進は、現代ヒトラーの力を表現。四肢を制御。ヒトラーはドイツを再び栄光に導ける唯一の人間だ。最良の一日だった。

28 小峰 総一郎『ドイツの中の〈デンマーク人〉——ニュゲールとデンマーク系少数者教育——』学文社、2007；——『ポーランドの中のドイツ人——第一次世界大戦後ポーランドにおけるドイツ系少数者教育——』学文社、2014、参照。

29 川手 圭一「マイノリティ問題とフォルクの思想」伊藤定良／平田雅博・編『近代ヨーロッパを読み解く』ミネルヴァ書房、2008、p. 300-301。

30 川手「第一次大戦後ドイツの東部国境と『マイノリティ問題』」『近現代史研究会会報』第58号、2006、p. 6。



- ③ヒトラー理想を共にした。総統＝民族の産物。
- ④僕の最大の夢は、林務官か農業学習だ。しかし民族全体に奉仕したい。民族の福祉にだ。父は兵士、僕はSA、職務は喜び。ヒトラーに仕えられぬと不幸だ。
- ⑤ナチに初めは不安を感じず。しかし、やがてナチズムが真実の土地に立つことを発見した。1931年にブレーメンとハンブルク行。民族離散を知る。…ナチ集會に初参加。ルスト演説、教職を捨て党に生きる姿に感銘。…真実を党誌の中で読む。1933年ヒトラーの姿を見た。信頼。だが、今なお他の信仰あり。今、それと闘っている。
- ⑥SAのため忙しい。勉強できない。休みたい。
- ⑦スポーツの中に総統の要求あり。アビトゥーアに合格したら指導したい。「健全な精神は健全な身体に宿る」。
- ⑧ユダヤと、資本主義の犠牲となった根無し草への怒り。農民は誇り。
- ⑨スポーツが好きだ、ユダヤ人の友がいる。英語は世界語だとすすめてくれた。しかし、道は異なる。友情は去り、ハーケンクロイツ旗の下に立つ。ユダヤ人とは会わない。
- ⑩[女生徒] 学校と宗教、そして父からの影響あり。時代を克服する力を相続。もう女の子には戻らない。…<sup>31</sup>

## B. 1937年アビトゥーア生 [1936年12月の生育歴作文。大要]

1933年体験は1937年のアビトゥーア生にも反映した。同校で生徒らはHJ (Hitler Jugend ヒトラー・ユーゲント) に殆んど加入、早くから忠誠を誓っていた<sup>32</sup>。他にBDM : Bund Deutscher Mädel ドイツ女子同盟, JM : Jungmädelsbund 少女団に加盟。さらにはSS : Schutzstaffel 親衛隊やSA : Sturmabteilung 突撃隊に加わるアクティブ生徒もいた。これら団体を通して参加した大行進や党大会の印象は、生徒に強く焼き付けられた。1936年当時のアクティブ生徒は述べる。

31 Vgl. Bracht, S. 445-448.

32 小峰「ライン地方のあるギムナジウム（3）」『中京大学国際教養学部論叢』8(1), 2015, p. 34-35, 参照。

①「反ボルシェヴィズムの党大会に出た…ヒトラーを見、演説を聴いた。彼に従おうと決意した…」。

②ヒトラーは誰も妨げられない…。ニュールンベルク党大会の印象。

③HJ 行進に参加した。総統の祖国再建を確信した。

・このとき、上記3人の男女生徒は、家庭の事情、ないしHJ/JM（ヒトラー・ユーゲント／少女団）の理由のみでアビトゥーア受験を許可された。学力不足だが、「人格全体を顧慮して」の受験承認であった。（各種編隊活動）

他方、一般メンバーのナチズムへの一体感は様々であった。

④家庭は、古い宗教的体制→理解はなかったが1934にHJ 加入

⑤「少年団は多宗派間の、しかし反ユダヤ同盟だった。僕はここで初めて静かに学べた」

⑥僕は同じ理想のために倒れた同志の担架の下に2度立った。（対立グループの争いで）

⑦ドイツ語教師は若い心をつかんだ、僕は彼に感謝する、云々。

⑧ファウストに感動した、云々。

⑨資本主義は血の紐帯の運命結合の自覚の中に解体している。

⑩「知よりドイツ精神」

⑪生徒らによる問題解明に一層習熟して、僕は、わが国の詩芸術作品をより深く内面的に理解することを学んだ。

⑫1918年11月に卑劣な「祖国」裏切り。「アカ」と「ユダヤ人」を憎悪する、云々。

⑬思い上りへの贖罪述べる。<sup>33</sup>

---

33 Vgl. Bracht, S. 451-454.

以上述べられたのは、生徒たちへのナチス教育の「成果」である。アビトゥーア試験に臨むに当たって生徒が綴ったのは、生徒たちの18年間の自己の形成史である。アビトゥーア試験に及第するため、教員に阿（おもね）っていることは考えられるが、若いたましいは、「純粹に」ナチス世界観と民族の運命に自己を投企している。まことにナチス教育は、心意・肉体・知識と、人格全体をナチスト錬成したと言ってよい。

（日本は一昨年「戦後70年」だった。わが国も、昭和16<1941>年3月1日の「国民学校令」は青少年の教育目的に<錬成>教育を謳い（「國民學校ハ皇國ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」国民学校令 第一条）、併せて国民には「臣民の道」を公刊して<1941.7>、国民全体に、「国体」を体しこれを日常生活の中で実践する国家奉仕の人格を求めたのである。）

#### （4）教員団、地域と学校

リューテン上構学校はアビトゥーアを付与する「中等学校」となり、旧師範学校以上に地方の文化的象徴であった。上構学校は、「学校ミサ」を行って、カトリック住民の宗教的要求に応じてラテン語教育を推進し、かつまた音楽や文学を住民に開いていった。教員団は戦後の経済難の中、学位をもつ一級教員中心に編成されて行った。近在や都市からやってくる下宿生は、町の経済にも寄与した。学校は地域と住民に愛着されていたと言える。

だが、ナチ時代となり、カトリック教会がナチ党との政教協約（コンコルダート；1933年7月20日）を締結してからは、学校、教会、住民とナチス支配は一体化した。かかる体制の中で、教員団のナチ党集団入党、アビトゥーア判定の「修正」、アビトゥーア受験資格の「緩和」が引き起こされたのである。父母・教会・地域住民には、もはやナチズム以外の別の価値選択は無かったのだった。

カトリック中央党シンパのペゲラーの父が、レートマーテの市長職を追われて一家で田舎町のリューテンに辿り着くのは、このような時代であった。（そのペゲラーはこのリューテン上構学校で、一人の熱烈なナチスト教師の感化のもと、党と祖国に献身する「ナチスト青年」となっていくのである。（第⑤回参照）

#### まとめ——ブラハト研究への書評、授業実践の教育史研究

最後に、本書に対するドイツ人研究者の受け止めを紹介し、授業実践の教育史研究の可能性について記すことにする。

## (1) ブラハト研究への書評

ドイツ人研究者の本書に対する書評は大要次の通りである。

## ① H. G. H. 氏 (in: Die Deutsche Schule 『ドイツの学校』, 1999)

1. 大冊のD論, 地方事例扱う。注目に値する。今までは, 副次的にしか扱わなかったプロイセンの上構学校史。大学への道。ワイマールの「進歩」は本当か。
2. 二つの貢献。
  - ①リヒャート覚書(1922)からルスト学制(1937)へ発展史位置付け。少数の学校型(上構学校)の歴史を, 事実に即し明らかにする。ドイツ高等学校型は, 少数で, 文化科ゆえに, ワイマール民主主義に寄与少なし。
  - ②田舎町(リューテン町)の完全なる資料に依拠。政治, 社会, 経済, 文化的背景の中の, 上構学校描く。授業内, 授業外の生活を通して。ワイマールから第三帝国までの連続を。
3. 教員団, アビトゥーア試験克明。
4. 疑問 ——
  - ①「上構学校 = 身分的」か。②「連続性」十分描出か。
5. いずれにせよ, カトリックの日常世界に「巧みなる第三帝国の侵入」を跡づけたことは疑いない。<sup>34</sup>

## ② Sigrid Blömeke 氏 (『教育科学旬報』, 2000)

1. 研究上の困難, 今まで。
  - ①資料上の困難, ②性急な結論, ③証言, 悪く言わぬ, ④ナチ研究あるも過渡研究は皆無。
2. 上構史, 1922プロイセン導入, 110校以上, 小市民, 都市の労働者子弟修学, 統一学校に反する。期待は, ドイツ共産党, 社会民主党, ナチ党も。性質 = ナチ適合 → 1933以後矛盾なくナチ適合
3. 得異な成功。個別研究, 複合性。ヴェストファーレン17校の一つ。学校のアビトゥーア資料利用, 完全保存。
4. ナチ期の要求 ↔ 非ナチ化の証言, 集団入党
5. 方法的周到さ
6. 注文
  - ①戦間期, 戦後も欲しい ②他校も欲しい<sup>35</sup>

34 H. G. H.: „Neuerscheinungen“, in: Die Deutsche Schule, 91. Jg., 1999, H. 1, S. 114–115.

35 Blömeke, Sigrid: „Buchbesprechungen“, in: Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Pädagogik, Bd. 76, H. 1, 2000, S. 87–88.

## ③ P. D. 氏

1. 第一部。プロイセン上構学校史。個別史である。
2. 第二部。当校当地の民主主義力量をよく分析。田舎上構学校の運命。<sup>36</sup>

## ④ Martina Schwerhoff 氏

1. 概要
  - ・1933年1937年、断絶か連続かを問う。
  - ・上構学校、今まで中等教育締め出しの田舎生徒にアビトゥーアへの道。師範代替、自校史。
2. 非ナチ化資料、自校アビトゥーア作文駆使。「正統授業」を再現。アビトゥーア ⊕ 研究グループ、生徒集団。
3. ドイツ高等学校連盟 ⊕ カトリック、ナチ教育理念適合。しかし鬼子。
  - ・議会主義否定、ナチズム留保なく受容。理念——ドイツ民族、土地、共同体、指導者、⊕ 教会の姿勢。キリスト教 vs. ナチズム対立 → ユダヤ人追放・労働者運動駆逐に行かず = ナチズムからの離反 → 別の教材へ。
4. アビトゥーア作文 → 授業を再現
  - ・家族、団体、行事。オリジナル完全資料で「正統授業」を描く。
  - ・連続 = ① 教員、② 教育内容<sup>37</sup>

書評の最後に、ブラハト氏の博士論文指導者で、本書を『教育改革研究』シリーズに収めたカ  
イム教授の「まえがき」も紹介しておこう。

## ⑤ Wolfgang Keim 氏（本書編者）

- ・1960-70年代からナチ研究多い。しかし、Bracht の研究のユニクさは次の点にある。
- ① 上構学校研究——中等学校の中の1校種、上構学校を対象。
- ② 個別史——リュエテン（Rüthen: Kreis Soest）の同校で20年、教員。個別史。
- ③ ワイマールとナチズムの断絶 vs. 連続——ワイマールからナチへの断絶と連続を問う。
  - ・ドイツ高等学校の形式と内容、また、アビトゥーア資料から探る。
  - ・カトリックの色の濃い Rüthen で、同時代の証言、また、後代の非ナチ化後の証言も吟味。
  - ・“völkisch-national”の吟味〔裏表紙〕。
  - ・本研究が中広く読まれることを望む。<sup>38</sup>

36 P. D.: „Rezension“, in: Annotierte Bibliographie für die politische Bildung, 1999, S. 192.

37 Schwerhoff, Martina: „Rezension“, in: Westfälische Forschungen, Bd. 49, 1999, S. 652-654.

38 Keim, Wolfgang: „Vorwort“, in: Bracht, a. a. O., S. 7-10.

これら書評は、視点の違いはあるがいずれも2つの時代——ワイマール時代とナチズムの時代——にわたる「変化」の中での中等学校を、特にその授業実践を歴史的に究明する仕事に分け入った点を高く評価している。ブラハトが「上構学校」という中等学校の傍系に位置する学校種の教育を、その授業組織と教育内容、アビトゥーア試験記録から丹念に探り、地方上構学校のリアリティーを描き出したことはたしかであり、その点に本書の最大の特長がある。

## (2) 展望——授業実践の教育史研究

ブラハト氏は、第二次世界大戦でも失われなかった学校文書館のアビトゥーア記録、作文、授業記録という第一次資料を掘り起こし、読み解いて、これまでのドイツ教育史書にはなかったやり方で、教育史研究を組み立てて見せた<sup>39</sup>。これはまことにユニークで意義深い。併せて、地方の教育当局資料も駆使してアビトゥーア修正事件を描くなど、中央の教育行政史、カリキュラム行政史では見えなかった現実の中等学校を浮き彫りにしている。ただ、これをさらに授業実践の教育史研究とするには以下の諸点が望まれる（望蜀の感を免れないが）。

今回ライン地方を焦点とした研究を跡づけながら、「民族政治科実習」や「ラインラントの雑種」に関わる時代の動き、「ヒトラー・ユーゲント」「外地ドイツ人」保護運動を知るにつけ、ブラハトの研究には大きな政治＝社会的構図が欠けていると感じた。これをいまま少し掘り下げないと、ドイツの中のライン地方の位置づけや、プロイセン文教当局におけるナチス化戦略のちがいは見えて来ない——ルスト文相は、シュトゥッカーやシーラハラに対しては旧来の文部行政の枠内に留まる；そのため、文部省・教育省内における官僚とヒトラー・ユーゲント急進派らとの対立・相克も生じているのである——。また、「ナチス教育学」とは何であるのかについては、仮説でもよいので大胆に提起してほしいと思う。さらに、当地はカトリック地域であり教会の教育への関わりはきわめて大きいと思われるが、これについては言及は少ない。わずかに、上構学校設立時の関与、カリキュラムへのラテン語教育期待、を述べたに留まる。教会の教育への対応、ナチズムへの姿勢も知りたいところである<sup>40</sup>。

さて、これらをふまえ、リューテン上構学校史の語るものをまとめると以下のごとくとなるであろう。

39 Schmitt, Hanno: "Am Ende stand das Wort "Umsonst". Nationalsozialismus an Marburger Schulen". in: Magistrat der Universitätsstadt Marburg (Hrsg.): Kirche und Schule im nationalsozialistischen Marburg. Marburg, 1985, でシュミットは、マールブルクにおける教育実態を生徒の生活に即して描き出す。ナチス抵抗教員の存在とこれへの停職処分 (S. 201-203), ナチ・イデオロギーを問う作文テーマ (S. 270-271.) など。しかし、いずれも断片的であることは否めない。

40 ブラハト氏は、最近では当地の教会や信仰運動の研究を行っているようである。Bürger, Peter: Friedenslandschaft Sauerland. (edition Leutkirche 1), Norderstedt: BoD (Books on Demand), 2016. 参照。

ワイマール時代のリューテン上構学校は、カトリック地域のニーズから（「ドイツ高等学校」の構想とは異なって）ラテン語を第一外国語に備える短縮中等学校となって、とくに第二代校長フルックは学校の学問性を高め、カトリックの学校文化（学校ミサ、宗教授業）を築き、地方色を採り入れたドイツ文化科を実践して地方の学問教育機関として着実に成果を上げつつあった。しかし、その後のナチズム態勢下に、教員個人の消極的抵抗は認められるにせよ、ナチスの教育支配はごく「正当に」浸透して行った。アビトゥーア記録は、そのことを如実に物語っている。上構学校教育は、ナチズムで「断絶」したのではなく、「連続」していたのである。

「学校は…一つの社会的な制度である」と勝田守一は言った<sup>41</sup>。リューテン校もまた、民主主義とナチズムという二つの時代の「制度」であった。ナチス時代には、ナチズム「教化」をストレートに受け止め、反映し、「時代」のニーズに対応したのである。また、農村地方の「ギムナジウム」として地域に屹立し続けたリューテン校は、ワイマールの教育民主化、中等教育を拡大する「真正の変化」を実現したとは言えない。それは地方英才のための「上昇学校」であった。否、当校は大学への道を保証したことにより、旧師範学校以上に「選抜」機関化したのである。（これには卒業生分析も重要となろう。）

「制度」に規定されつつも、「人類の文化的なもろもろの価値（科学・芸術）を媒介にして、子どもを社会的な個人に育てる」、そのような「開かれた社会的統制」の教育、「創造的な社会的統制」<sup>42</sup>の教育は、次の時代を俟たなければならなかったのである。

#### ●現在のリューテン校とブラハト氏

ブラハト氏は現在は退職し、地方史の研究者として過ごしている（宗教、抵抗運動、マリア・カーレやハンマーシュミットの研究）。校長在職中は、研究とともに学校の教育力を高める改革に果敢に挑んで行った。教員団の若返りをはかり、学校の教育力を高めた。45分の細切れ授業から67.5分制授業を導入、これにより、それまでの一日6コマの授業から4コマ制へ。また、バルを廃



Prof. Dr. Soichiro Komine von der Chukyo Universität aus Japan besuchte uns im Rahmen seines Forschungsaufenthaltes in Deutschland, um sich in unserem Schularchiv umzusehen. Sein besonderes Interesse galt den seit 1932 archivierten Abiturarbeiten. Mit Schulleiter Dr. Bracht - ausgewiesen durch seine Dissertation zum Höheren Schulwesen - tauschte sich Prof. Komine über die Reformpädagogik in der Weimarer Republik und im Übergang zum Nationalsozialismus aus.

ブラハト校長と筆者  
(Rüthner Hefte, Nr. 37, 2004/2005, S. 48.)

41 勝田守一「学校の機能と役割」『教育と教育学』岩波書店、1970、p. 432。勝田は、「望ましい国民」を育て上げる「教化」は、「外的な権威を背景にして、行動に固定化を要求する」、それは「子どもの生活の現実の価値を否定」し「科学や創造的な芸術の価値は、本質的に無視される」と言う。同上、p. 440-441。

42 同上、p. 443-444。

止し、生徒を信頼して彼らの学問探究を尊重した（——このインテンシブな授業形態は「リューテンモデル」として多くの参観者を集めている——）。その結果、生徒の学力は多くの項目で州内の最高レベルに達した。これらの事績によって校長はノルトライン・ヴェストファーレン州から表彰を受け、父母の要請で任期を1年半延長されたのである。（フリードリヒ・シュペー校 HP から<sup>43</sup>）

筆者は2005年の在外研究時に同校を訪れ、氏の研究についてうかがうと共にアビトゥーア記録のいくつかを複写させていただいた。今回、氏の研究を紹介しながら、筆者自身ナチス教育についても多少深めることができた。心より御礼申し上げたい。

---

43 フリードリヒ・シュペー＝ギムナジウム HP <http://www.fsg-ruethen.de/fsg/index.php/unsere-schule/schulgeschichte-1> 最終閲覧：2016年3月



## 文 献

1. Bessling, Reiner: Schule der nationalen Ethik. Johann Georg Sprengel. Die Deutschkundebewegung und der deutsche Germanistenverband, Frankfurt am Main: Peter Lang, 1996.
2. Blömeke, Sigrid: „Buchbesprechungen“, in: Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Pädagogik, Bd. 76, H. 1, 2000.
3. Bohm, Winfried: Wörterbuch der Pädagogik. 12., neuverfasste Aufl. Stuttgart : Kröner, 1982.
4. Bracht, Hans-Günther: Das höhere Schulwesen im Spannungsfeld von Demokratie und Nationalsozialismus: ein Beitrag zur Kontinuitätsdebatte am Beispiel der preußischen Aufbauschule. Bern: Peter Lang, 1998.
5. Bürger, Peter: Friedenslandschaft Sauerland. (edition Leutkirche 1), Norderstedt: BoD (Books on Demand), 2016.
6. Die Neuordnung des preußischen höheren Schulwesens. Denkschrift des Preußischen Ministeriums für Wissenschaft, Kunst und Volksbildung. 1924, Berlin: Weidmannsche Buchhandlung, 1924, S. 3-4. (プロイセン文部省 (編) (小峰総一郎訳) 「プロイセン中等学校制度の新秩序」『中京大学教養論叢』35(1), 1994/9.
7. Erziehung und Unterricht in der höheren Schule. 1938. 1. 29, Berlin: Weidmann, 1938.
8. Hehlmann, Wilhelm: Wörterbuch der Pädagogik. Stuttgart: Kröner, 1971.
9. H. G. H.: „Neuerscheinungen“, in: Die Deutsche Schule, 91. Jg., 1999, H. 1.
10. Keim, Wolfgang: „Vorwort“, in: Bracht, Hans-Günther: Das höhere Schulwesen im Spannungsfeld von Demokratie und Nationalsozialismus: ein Beitrag zur Kontinuitätsdebatte am Beispiel der preußischen Aufbauschule. Bern: Peter Lang, 1998.
11. Margies, Dieter: Das höhere Schulwesen zwischen Reform und Restauration : die Biographie Hans Richerts als Beitrag zur Bildungspolitik in der Weimarer Republik. Neuburgweier/Karlsruhe: Schindele, 1972.
12. P. D.: „Rezension“, in: Annotierte Bibliographie für die politische Bildung, 1999.
13. Pöggeler, Franz: Aufgewachsen in zwei Reichen: Kindheit und Jugend 1926 bis 1945, Bern: Peter Lang, 2009.
14. Rütthner Hefte, Nr. 37, 2004/2005.
15. Schmitt, Hanno: „Am Ende stand das Wort “Umsonst”. Nationalsozialismus an Marburger Schulen“. in: Magistrat der Universitätsstadt Marburg (Hrsg.): Kirche und Schule im nationalsozialistischen Marburg. Marburg, 1985.
16. Schmoltdt, Benno: Zur Theorie und Praxis des Gymnasialunterrichts (1900-1930). Eine Studie zum Verhältnis von Bildungstheorie und Unterrichtspraxis zwischen Paulsen und Richert. Weinheim/Basel: Beltz Verlag, 1980.
17. Schwerhoff, Martina: „Rezension“, in: Westfälische Forschungen, Bd. 49, 1999.
18. Weber, Rita: Die Neuordnung der preußischen Volks[s]chullehrerbildung in der Weimarer Republik: zur Entstehung und gesellschaftlichen Bedeutung der Pädagogischen Akademien. Köln; Wien: Böhlau, 1984. (Studien und Dokumentationen zur deutschen Bildungsgeschichte, Bd. 26)
19. Zymek, Bernd: „Expansion und Differenzierung des höheren Schulsystems“, in: Langewiesche/Tenorth (Hrsg.): Handbuch der deutschen Bildungsgeschichte. Bd. V. 1918-1945, München: Beck, 1989.
20. 浅野豊美『帝国日本の植民地法制—法域統合と帝国秩序』名古屋大学出版会, 2008.
21. 阿部重孝「新しいドイツの高等学校」(『阿部重孝著作集 第六巻』日本図書センター, 1983 原著 1923).
22. 勝田守一「学校の機能と役割」『教育と教育学』岩波書店, 1970.
23. 川手圭一「マイノリティ問題とフォルクの思想」伊藤定良 / 平田雅博・編『近代ヨーロッパを読み解く』ミネルヴァ書房, 2008.
24. ———「第一次大戦後ドイツの東部国境と『マイノリティ問題』」『近現代史研究会会報』58, 2006.
25. 小峰 総一郎 / フリッツ・カルゼン『現代ドイツの実験学校』明治図書, 1986.
26. 小峰 総一郎「ライン地方のあるギムナジウム (1)」『中京大学国際教養学部論叢』7(1), 2014.
27. ———「ハンス・リヒャートとプロイセン中等学校改革」日本教育学会『教育学研究』63(4), 1996.
28. ———「ライン地方のあるギムナジウム (3)」『中京大学国際教養学部論叢』8(1), 2015.
29. ———『ドイツの中の≪デンマーク人 — ニュダールとデンマーク系少数者教育 —』学文社, 2007.

30. ——『ポーランドの中のドイツ人——第一次世界大戦後ポーランドにおけるドイツ系少数者教育——』学文社, 2014.
31. 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店, 1996.
32. 下松桂馬『平和の武装獨逸労働奉仕制度：青年教育運動の再建』刀江書院, 1937.
33. 朝鮮總督府 [編]『ポーゼン州國語教育に関する調査報告』[朝鮮總督府], 1913.
34. 『ドイツ』11月上旬号 (ナチス教育特集), 日独出版協会, 1942.
35. 百々巳之助・景山哲夫『ヒットラー・ユーゲント』刀江書院, 1938.
36. 新見吉治『ナチス祖國愛の教育』三友社, 1935.
37. プロイセン文部省 (編) (小峰総一郎訳)「ドイツ高等学校・上構学校教則大綱」『中京大学教養論叢』第34巻第1号, 1993/7.
38. 文部省教育調査部 [編]『歐米に於ける中等教育制度改革問題』文部省教育調査部, 1935.
39. 文部省教育調査部 [編]『獨逸の高等學校』文部省教育調査部, 1941.

## URL :

1. 国立公文書館 アジア歴史資料センター 「国際連盟少数民族保護問題雑件 1. 上部「シレジア」ニ於ケル獨逸系少数民族圧迫問題」ほか [https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/MetSearch.cgi?SUM\\_KIND=SimpleSummary&IS\\_KIND=detail&IS\\_SCH=META&IS\\_STYLE=default&DB\\_ID=G0000101EXTERNAL&GRP\\_ID=G0000101&IS\\_START=3&IS\\_EXTSCH=&DEF\\_XSL=default&IS\\_SORT\\_KND=ASC&IS\\_SORT\\_FLD=&IS\\_TAG\\_S1=InD&IS\\_KEY\\_S1=%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E9%80%A3%E7%9B%9F%E3%80%80%E5%B0%91%E6%95%B0%E6%B0%91%E6%97%8F%E4%BF%9D%E8%AD%B7%E5%95%8F%E9%A1%8C%E3%80%80%E9%9B%91%E4%BB%B6&IS\\_NUMBER=1&SUM\\_NUMBER=20&SUM\\_START=1&IS\\_LYD\\_DIV=&LIST\\_VIEW=&SHOW\\_EAD\\_ID=M2006092116063996729&ON\\_LYD=on](https://www.jacar.archives.go.jp/aj/meta/MetSearch.cgi?SUM_KIND=SimpleSummary&IS_KIND=detail&IS_SCH=META&IS_STYLE=default&DB_ID=G0000101EXTERNAL&GRP_ID=G0000101&IS_START=3&IS_EXTSCH=&DEF_XSL=default&IS_SORT_KND=ASC&IS_SORT_FLD=&IS_TAG_S1=InD&IS_KEY_S1=%E5%9B%BD%E9%9A%9B%E9%80%A3%E7%9B%9F%E3%80%80%E5%B0%91%E6%95%B0%E6%B0%91%E6%97%8F%E4%BF%9D%E8%AD%B7%E5%95%8F%E9%A1%8C%E3%80%80%E9%9B%91%E4%BB%B6&IS_NUMBER=1&SUM_NUMBER=20&SUM_START=1&IS_LYD_DIV=&LIST_VIEW=&SHOW_EAD_ID=M2006092116063996729&ON_LYD=on) 最終閲覧：2016/12.
2. フリードリヒ・シュペー＝ギムナジウム HP <http://www.fsg-ruethen.de/fsg/index.php/unsere-schule/schulgeschichte-1> 最終閲覧：2016/3.
3. ベルンハルト・ルスト (Bernhard Rust) [https://de.wikipedia.org/wiki/Bernhard\\_Rust](https://de.wikipedia.org/wiki/Bernhard_Rust) [https://de.wikipedia.org/wiki/Bernhard\\_Rust](https://de.wikipedia.org/wiki/Bernhard_Rust) 最終閲覧：2016/8.

(2017年1月5日)